

解答

一

問一 1 コ 2 オ 3 エ 4 ケ 5 ク 6 ア 7 キ
問二 家にある点
問三 ア

問四 （平井） 幼いころは母親が大好きだったが、小学校高学年ごろから母親が自分の側に立ってくれない気配を感じ母親の苦しみを理解できていなかったが、有明学園に進学し陸上部で結果が出るようになり、また寮生活を始めたからかもしれないが、母親に対するとがっていた気持ちが和らぎ、母親に感謝し謝罪する気持ちにもなった。しかし、その気持ちは、素直に表現できない自分に対する「新しいわだかまり」になっていた。

問五 （岡崎） 小さいころ瞬太は、自分が教えた点字でよく手紙を書いてくれたが、成長するにつれ手紙を書くことはなくなっていた。しかし、10年ぶりに瞬太から感謝や素直な気持ちが伝わった点字の手紙をもらい、心から嬉しくずつとかみしめていたい気持ちでいる。

問六 走る瞬太を見ている
問七 はなかった（。）

問八 駅伝で、瞬太は自分の力を十分に発揮できる実力がついて自信も出てきた。自分が活躍する姿を、ラジオで放送してもらうことによって、目の不自由な母親に感謝の気持ちを伝えたいという気持ち。

問九 a 筆頭 b 機能 c 支障 d 専用 e 看板

二

問一 1 a 破〔って〕 b 備〔えた〕 c 口調

問二 教師も生徒ゝいない

問三 ア

問四 何か価値あるものが生まれてくるというような知的生産性に欠け、多様な個性や生産性というものを持った若者たちが排出されるというようなことが決まらないという点。

問五 今何が起きているのかわからない状況の中で、やるべきことを見極め的確に判断できる人

問六 「全部疑ってかかる」とは、ひとつひとつの言葉の信憑性を吟味するということであり、「頭から信じない」とは、ある言葉がどのような意味を持つのかを考えることなく排除したり無視したりすることである。

問七 イ

問八 エ

解説

一

問二 小さなころの瞬太は、お母さんが大好きで、いつも一緒に行動していました。その時の様子は、母親が点字を教え、母親によく手紙を書いていた頃と重なります。

問三 自分が悪さをしているのは、母親が目が悪いことをいいことに悪さをしていると言われたり、目が悪いから子供を育てられないと言われたり、自分の悪さを母親の目が悪いことと結び付けられることに、腹を立てているんですね。

問四 駅伝で活躍し注目選手になると、アナウンサーも情報を持っていて、名前や様子を細かく伝えてくれるはずです。都大路で活躍した自分も注目選手になっているはずであり、ラジオもきちんと伝えてくれるはず。ならば、目の不自由な母親に、自分が活躍する姿をラジオ放送で絶叫してもらうことで、大切に育ててくれたことに対する感謝の気持ちを伝えたいと思っています。

二

問四 ポイントは、①知的生産性がないこと、②多様な個性や可能性を備えた若者たちが次々と排出されることが決してない、ということの2点です。

問五 ここでいう大人とは、短期間に成熟することを求められている時代である転換期の大人のことです。転換期では、今何が起きているのか理解できない状況ですが、この状況の中で今何が起きているのかを適切に見極め、自分がこれからどのように行動していかなければならないかを判断できる人のことです。

問六 傍線⑥の直後に書かれているように、「全部疑ってかかる」とは「ひとつひとつの言葉を吟味するということ」です。すなわち、ある言葉が信じられるかどうかの度合いを、詳しく調べ確かめるということです。また、「頭から信じない」とは、傍線⑤の直前に同列に書かれているように、ある言葉がどのような意味があるのかを考えず、決めつけてしまうことです。